

GOD WITH US

Part 10: EARLY LETTERS

Message 27 – Philippians

Living Above your Circumstances

Philippians 1&2

January 10, 2021

神はわれらと共に

パート 10 : 初期の手紙

第 27 メッセージ - ビリピ人への手紙

状況の上に生きる

はじめに

パウロと仲間は、地方当局による大反対の中、2度目の宣教旅行でビリピに教会を建てました（使徒 16 章）。パウロとシラスは、むち打ちの刑を受け、投獄された後、牢獄の看守とその家族を含む、信者の小グループが結成されました。ビリピの教会は、女性実業家のリディアの家で集会していた可能性があります（参照：使徒の働き 16:40）。使徒の働きの中の代名詞の変化（「彼ら」から「私たち」へ、そして再び「彼ら」に変化します - 16 : 7,10、40）に基づいて、その作者、ルカは、仲間のメンバーが町から追い出された後もビリピにとどまり、5年間牧会したと推測されます。それから何年も経ち、今ここにパウロは、ローマの獄中からビリピの信者たちに宛てて手紙を書いています。彼らが互いに共にいる間、強い一致とへりくだりを維持することを奨励しています。獄中からパウロは、永遠の命の視点を維

持していれば、人生のどのような状況においても喜びに満たされていることができることの模範を見せてくれています。

パウロとその仲間たち：1：1-11

パウロは、いつも通り初めの挨拶から手紙を書き始めます。次に、ビリピの信者たちに愛と感謝を表します。今に至るまで、パウロと共に福音の前進のために参加したことが称賛されています。彼らの祈り、励まし、パウロへの定期的な経済的な贈り物と物理的援助によって、パウロの苦難の時に分かち合いました。パウロは、キリスト・イエスの日（キリストの再臨の日／ビリピ人 1:6）まで、神がこの信者たちの内に、個人的にもグループとしても、良い働きを続けられると確信しています。

1:6 そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。**1:7** わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。（ビリピ人 1：6，7）

パウロは、ビリピの信者たちに「お互いへの愛で満ちている」ように勧めています。これは信者たちの必要性に関する初期の促しです。ビリピ人への手紙第 2 章 1-11 節の警告の箇

所から、この教会には、分裂があったことが明らかです。この冒頭の部分で、パウロは、お互いへの愛が育つことを祈っていると述べています。

1:9 わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、**1:10** それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、**1:11** イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように。
(ピリピ 1 : 9 - 11)

イエス様が言われました：「**13:35** 互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」（ヨハネ **13:35**）。キリスト者が不和や喧嘩に悩まされると、キリストに対する彼らの証の効力は弱まります。一方、信者たちが謙遜に歩み、困難な状況においても和解と敬意を持って互いに向かって歩むことができるとき、キリストに対する彼らの証しは強められます。人間関係において、一致を追求するために何ができるでしょうか？ あなたの「愛を増し加える」ことが可能な部分はどこでしょうか？

パウロの状況：1：12-20

パウロは非常に困難な状況下（投獄）に置かれていましたが、それでも神の目的を見出すことができました。神は、パウロの試練を通して、獄中にいるという状況をお用いになっただけでなく、町や都市の人々を通して、イエス・キリストの福音を前進させられました（ピリピ人 1 : 12-18）。それがパウロにとって最も重要なことでした。

1:12 さて、兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい。**1:13** すなわち、わたしが獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかになり、（ピリピ人 1 : 12, 13）

プレトリアンの警備隊は、ローマ軍の中でもエリート兵士（特殊部隊）でした。おそらく彼らはパウロの投獄を監督するために割り当てられていたのでしょう。いずれにしても、キリストの福音はパウロを通してこれらのエリート兵士にまで届いていました。牢獄の外側では、福音は別の方法で前進していました。実際、信者たちは、恐れることなくキリストについて誠実に話す勇氣に満たされていました。しかし、他の人々は、パウロの投獄を利用して、利己的な野心からキリストについて説教することによって、自分たちの評判を高めていました。それにもかかわらずパウロは、自分の評判には、

それほど関心なく、むしろ動機に関係なく、キリストの福音が広く伝えられていることを喜びました。たとえ自分の宣教と他の宣教を比べられても、「自己中心的」になることはありませんでした（第2章にある警告の良い例）。

生きることはキリスト、死ぬこともまた益です：

1：20-26

ここでパウロは、生と死（そしてその中間のすべて）についての彼の心の明確な洞察を述べています。

1:20 そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしが、どんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。**1:21** わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。**1:22** しかし、肉体において生きていることが、わたしにとっては実り多い働きになるのだとすれば、どちらを選んだらよいか、わたしにはわからない。**1:23** わたしは、これら二つのもの間に板ばさみになっている。わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい。**1:24** しかし、肉体にとどまっていることは、あなたがたのためには、さらに必要である。（ピリピ人1：20－24）

パウロは、キリストに服従している限り、生死を問わず、その身によって主があがめられると信じていました（ピリピ人1:20）。パウロは、イエス・キリストの僕であったので、その運命は人や状況によってではなく、主によって支配されていました。「生きる」ことは、イエスに仕えて生き抜くことでした。つまり、彼の人生における神の目的のために仕えることでした（使徒13:36）。一方、「死ぬ」こともまた「益」でした。すぐにイエス様の御前に行けることを知っていたからです。使徒にとって、死は悲劇的喪失ではありませんでした。むしろ、この人生に留まるよりも『はるかに喜ばしいこと』であったのです。それでもパウロは、神の民の羊飼いととして、この世における自身の存在が彼らのために必要であり、信仰の内の成長を強めることができるという緊張感をもって生きました。パウロがしばらくの間地上に留まり、人々の霊的必要性に応えることを神が望んでおられると確信し、どんな犠牲を払ってでも喜んで従う心構えがありました。

『生きることはキリスト、死ぬこともまた益です』とは、なんと素晴らしい視点でしょう。私たちがこれらの視点をもって生きる限り、神があらゆる状況を通して、神の目的を前進させてくださることを知ることによって、私たちはあらゆる状況において神を信頼することができるようになります。生きる時間が与えられるなら、それはキリストの僕としての命、キリストを敬うための時間が与えられていることを意味

します。また、生涯において神の目的を果たすための時間が与えられていることも意味します（使徒 13:36）。一方、神が天国の家に連れて行くにふさわしいと思われるなら、死もまた「益」です。なぜなら、その死の瞬間に、キリストと共にいるからです。重要なのは、私たちがこの人生を旅するとき、キリストに服従し続けなければならないということです。これこそがパウロとともに、「生きることはキリストであり、死ぬこともまた益である」と自信を持って宣言するための唯一の方法です。（パウロはおそらく、これと同じ効果をもたらすイエスのみ言を考えたと違いありません。マルコの福音書第 8 章 34-36 節を参照してください。）

キリストの内に一致して立つ：1：27-30

この手紙には、キリストの体の一致に大きな重点が置かれています。ピリピの教会で、小さな派閥や分裂が生じていた可能性があります（ピリピ人 4：2,3）。いずれにせよパウロは、彼らに一つの霊によって硬く立つように勧めています。

1:27 ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたが一つの霊によって堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために力を合わせて戦い、**1:28** かつ、何事についても、敵対する者どもにろうばいさせられないでいる様子を、聞かせてほしい。このことは、

彼らには滅びのしるし、あなたがたには救のしるしであって、それは神から来るのである。**1:29** あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じるだけでなく、彼のために苦しむことをも賜わっている。**1:30** あなたがたは、さきにわたしについて見、今またわたしについて聞いているのと同じ苦闘を、続けているのである。（ピリピ人 1：27－30）

パウロが最初にピリピで、むち打ちの刑を受けて投獄されたときに経験した苦しみをピリピの人たちは目撃していることを思い出させます（使徒 16 章）。おそらく彼らが経験した苦しきは、教会に緊張を引き起こすような不安や恐れを生み出したことでしょう。パウロは、苦しみに直面したときの一致は、彼らを引き裂こうとしているその勢力に対する勝利の確かな印であることを思い出させます。

キリストのための苦しきは、神からの賜物であるとパウロが言っていることに気づかれたでしょうか（ピリピ 1:30）。キリストを信じることは、一つの祝福です。そして、キリストのために苦しむことができることもまた別の祝福です。苦しみに対する見方が一転します。私たちに反対する人々を経験するときを感じる恐れや不安は、肉体的、関係的、経済的にも苦しめます。パウロの模範と励ましから教訓を得ることができます。ペテロは同じことを言いました。「**2:19** もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍

ぶなら、それはよみせられることである。2:20 悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。」(ペトロの手紙一 2:19, 20) 正確には、私たちの悪い選択のために苦しんでいるとき、神からの祝福はありませんが、人生でキリストを敬うことで苦しむとき、神からの祝福があります。

キリストの体の一致、心のへりくだり：2：1-11

そのような一致は、へりくだりから生まれます(ピリピ人2:1-11)。さらに、私たちの主イエス様のへりくだりを熟考し、模倣とすることによって、心と意思の一致が促進されます。神が人となられたほどに、ご自分を無にされたことは、私たちの権利を互いに放棄する教訓の模範です。

2:3 何事も党派心や虚栄からするのではなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。**2:4** おおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。**2:5** キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。**2:6** キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、**2:7** かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをと

り、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、**2:8** おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ人2：3－8)

この一節は、実践的かつ、神学的に重要なところですが。実際、私たちの神との和解の必要性のために、天の栄光に固執されることなく、私たちと同じ人間の姿をとって地上に誕生されたイエス様の例は、私たちに自分を無にすることと他者を配慮するための動機を与えます。神学的には、神の子イエス様がいかに人となられたかについての洞察を与えます。イエス様は「ご自分を無にされ」、僕の形をとって人間の姿になりました。初期の神学者たちは、『イエス様は、何から「ご自分を無にされた」のか。』という疑問について話し合った結果、イエス様は(神の属性の)神としての本質的な性質から無にされたのではないことが明らかになりました。イエス様にとって、ひと時も「神であることを止める」ことは不可能でした。したがって、イエス様は地上におられる間、神の属性を表示または行使する権利をご自身から無にされたに違いありません。このようにイエス様は、「完全に神であられ、完全に人でもある」一方で、神の完全な属性であることに変わりはなく、ご自分の立場を進んで脇に置かれました。たとえば、イエス様が瞬間的に肉体的な栄光を表された変貌の山で、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを驚かせたその光景には、そのような「自身を無にする」という示唆が見られます。さ

らにイエス様は、山を下られたときに、一瞬のうちにその神の栄光を「隠され」ました。

別の例として、イエス様がゲッセマネで逮捕され、ペテロがイエスを守るために剣を抜いたとき、主はペテロを叱責され、『わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団

(12,000x12=144,000) 以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。(マタイ 26:53,54)』と言われました。同様に、イエス様は、私たちのための救いの御業を成し遂げてくださるために、地上におられる間、神聖な特質の表示を控えられました。ピリピ教会の信者たちが他者の必要と権利を自分よりも優先する動機となるのは、イエス様ご自身が権利を脇に置かれた、このへりくだりであるとパウロは教えていました。

ご自身を無にして、へりくだられたイエス・キリストの模範についての部分をパウロがどのように終わらせるかに注意することが重要です。パウロが「イエス様は死に至るまで従順であられ」と言及してから、残酷で屈辱的な死を特定しています。パウロは、イエスの恐ろしい死、さらには十字架での死を表すために、1つの単語(英語では5つの単語)を用いています。ギリシャ語では、“even cross-death (十字架死にまでも)”と書かれています。ローマ市民であるパウロは、ローマ帝国が十字架刑を極悪犯罪者のために用いた最も重い死刑方法であつ

たことを知っていました。十字架に磔になるということは、単なる処刑ではありませんでした。磔にされた者から命を一滴ずつ時間かけて抽出する、凶悪な残虐行為であり、ゆっくりと苦しませ死なせて行く公開処刑、つまり最も残酷で苦しみに満ちた死刑方法でした。ローマ法によって、十字架刑の対象となるのは奴隷と外国人に限られていました。主であり救い主であるイエス様の受肉、無、生涯と死、さらには十字架の死までも熟考しながら、パウロは息を呑んだに違いありません！

教会であれ、家庭であれ、学校であれ、職場であれ、人間関係があるところであればどこでも、この原則は不変の真実です。それぞれの思いと心のへりくだりは、人間関係の輪の一致につながります。他者の必要を自分の必要よりも優先するとき、これは利己主義が繁栄することが不可能な愛の雰囲気を育みます。「キリストはご自身を低く」されました(ピリピ人2:8)。あなたの人間関係の輪において、どこで謙虚になることを選択できますか？自己意志を放棄する必要がある所を示していただき、へりくだりと無我を選択できるように神に求めましょう。その選択があなたの人間関係に癒しと完全性を促すかもしれません。

あなたを通して神を輝かせる：2：12-18

キリスト者は、努めて救いを手に入れることはできませんが、救いの達成の（救いの賜物の完全な実を結ぶ）ために努める必要があります。

2:12 わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。 **2:13** あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである。

（ピリピ人2：12，13）

神を喜ばせる人生を生きることは、内で働いてくださる神と、全能で公正な神に対する健全で敬虔な恐れをもって信仰に生きることを選択する側とのパートナーシップを要します。神は、私たちの内に、また、私たちの生涯を通して、前進させたいと願っておられるご計画を持っておられます。私たちが神の御霊と歩調を合わせるとき、神と協力して「神に喜んでいただく働きをする」こととなります。ピリピ人への手紙第1章20節でパウロは、「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである。（ピリピ人1:20）」と述べています。ここでパウロは、神の喜びは、信者

が神と歩調を合わせて歩むときに満たされるという同様の考えを表現しています。

より具体的には、私たちがこれらの神から与えられた目的を果たすとき、信者は暗い世で光として生きるように召されます。

2:14 すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。 **2:15** それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。 **2:16** このようにして、キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる。（ピリピ人2：14－16）

パウロは、「飲み物のささげ物」が主に注がれているかのように自身の命をみなしました。比喩的に言えば、パウロのエネルギーは、神が仕えるように召された他の人々のために注ぎ出されました。（参照：ピリピ人第1章24-26節。パウロが彼らのためにこの世にとどまる必要があると述べました。）

従うべき 2 つの例：2：19-30

テモテとエパフロデトは、それぞれの並外れた素質のためにパウロから称賛されています。テモテは、パウロの「霊的息子」として常に高い評価を受けていました：

2:20 テモテのような心で、親身になってあなたがたのことを心配している者は、ほかにひとりもない。**2:21** 人はみな、自分のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことは求めている。 (ピリピ人 2：20, 21)

エパフロデトは、キリスト者としての人格の模範でもありました。彼はピリピ出身であり、ピリピ教会から贈り物を持ってパウロに届けました。この奉仕のために、病にかかり死にそうな目にあつたことで、ピリピの信徒たちが心配しているのではないかと心苦しく思いました。

2:25 しかし、さしあたり、わたしの同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者としてわたしの窮乏を補ってくれたエパフロデトを、あなたがたのもとに送り返すことが必要だと思っている。**2:26** 彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがっているからである。その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたので、彼は心苦しく思っている。

(ピリピ人 2：25, 26)

パウロはこの手紙を持たせて、エパフロデトをピリピに送り返し、ピリピの教会に、キリストとその民への献身にふさわしい方法で彼を受け入れるようにと頼みます。

2:29 こういうわけだから、大いに喜んで、主にあつて彼を迎えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。**2:30** 彼は、わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかつた分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである。 (ピリピ人 2：29, 30)

ディスカッションの質問

1. ピリピ人への手紙第 1 章 12,13 節を読み、あなたの困難な状況が、ご自身を明らかにされるために、またはあなたを通して神の使命を前進させるために用いられた状況を経験されたことがありますか？
2. 生と死に関するパウロの見方は、あなたにどのような影響を与えますか (参照：1：20-26)。
3. 十字架の死にまでも従われたキリストのへりくだりについて考えてください (ピリピ人 2：1-11)。これは他の人との関係に対するあなたの見方をどのように変えますか？
4. テモテとエパフロデトの例から何を倣いたいと思われましたか？